



巻頭言

生活芸術が花開く

— 環境が保有する価値の探求から —

青木 久子

感傷的な手紙

蒸し暑い六月のある日、門前に立って子どもを出迎えているいつもの登園風景なのに違和感を感じた。これは何としたことだろう！ 自転車の籠に水着の袋とカバンを入れ、園児を後部荷台に乗せて来る親が急増しているのである。職員室に戻ると手紙を書いて全園児に配布した。教育の共同作業に協力して下さることに感謝する一方、特別な事情がないのに宅配便のごとく自転車の荷台に乗せられて荷物と一緒に下ろされていく子どもたちの育ちはどうなるのだろうか、日本の未来は大丈夫だろうかという「問い」を発したのである。翌日、早速反論が殺到した。「日本の未来などとおおげさ過ぎる」「宅配便に例え



るなど行き過ぎ”、表現が感傷的過ぎる”と言うのである。この反撃は有り難い。”歩くこと”、”生きること”をテーマに保護者との対話が始まるからである。私は大学兼務のためなかなか親との話し合いの時間がとれないので、一つひとつの意見に手紙を書いた。

あなたのお子様は、自分で必要な持ち物を持って登園することで園という子どもの世界に自分を向ける意志が育つと思いませんか。自分の足で歩いて来ることで家から園までの空間認識を確かなものにすると思いませんか。街の人々の営みや自然の変化を見聞きして社会を学習すると思いませんか。面と向かうのではなく寄り添って親子で歩く時間に子どもに会話のテーマを見つげだす力が育つと思いませんか。歩くことで足腰を強くし生涯自分を支える力がつくと思いませんか等々、自分の足で歩いて心身共に自己拡大することの意味を一緒に考えたのである。翌日から門前に止められる自転車は一つもなくなつた。狭い玄関が広くなり緊急災害時の避難路も確保されてほつとほつとも、歩くことを求めたのは酷なのだろうかと自問自答した。

環境が保有する教育の内容

我が園の創設者小林宗作は「教育は何物にも束縛されない自由なものでなければならぬ」「教育は子どもに本当のことだけを教えなければならない」「子どもの感性を無視して教育を他の目的に利用してはならない」として自由教育を高らかに謳いあげた方である。



しかし教育の嘘が常態化し、人間の精神を自由にすることが取り違えられ、教育が将来の生活安定の手段と化した時代にこの三つの教育理念を実践するには勇氣がいる。人間が二足歩行を獲得して得た自由によって自己拡大する喜びすら求めにくい時代だからである。

そこで、園長に就任するに当たって環境が保有する価値を教職員や保護者と共に学習することから教育の内容を生み出そうと考えた。園環境の中に学習内容を埋め込み、子どもが対象に深くかわればかわるほど学ぶ意志が強くなり、経験する内容の質が高まる生活を発見していこうとする試みである。池や川、起伏に富んだ山を作り、木を植え、小さな畑を作り草花を栽培した。また砂場や泥場を作り、丸太や材木、竹などの素材を置いた。

子どもが怪我をする、泥で服が汚れるといった初期の保護者の苦情は、やがて環境が保有する価値をどん欲に吸収する子どもの活力によってかき消された。池にはトンボが卵を産みヤゴが孵る、睡蓮やアヤメが咲く、水流で水車が回り落ち葉が流れ、冬には氷が張る、水は侮ると死に至るなど、川と池をめぐる四季の生活が子どもを賢くした。丸太はベンチに、汽車に、棚に、橋にと多目的に活用され、戸外に遊びの拠点が出来ることでごっこが盛んになり、創造性や運動能力が高まった。目当てをもち自力で木に登る経験は子どももの視座を変え伸びやかさを生みだした。虫や野鳥が好む樹木や果実を知り生態を知ることから人間との関係も感じた。植物の中にある毒性や酸性を発見しながら色水を作り紙を漉き、それを活用する人間の知恵や植物の不思議も学んだ。つまり、手間のかかる環境づ



くりの中から教育内容が豊かに生み出されてきたのである。

生活芸術の花が開く

こうしてあの自転車論争から二年半がたった。今、環境に深くかわる子どもたちになさな芸術家・表現者としての意志が感じられる。自然に歌が湧き出ていつのまにか声が重なり音楽の場ができる、棒や葉や草などの自然物を使って庭いっばいに造形する、画板をもつて絵を描きに行くと一時間以上没頭している、泥や砂のモチーフでギャラリが開かれる、ミュージカルも創作されそこに熱中するなど、子どもは表現したくてたまらない存在となっているのである。生活は芸術であった古の人々の暮らしに少し近づけたようなうれしい風景である。

環境によって嘘のない本物との出会いをもたらし、本物の厳しさによって自己を陶冶し、自学自動の活力を湧かせて自由感を子どもに提供しようとする私の小さな試みは、日々の教育作用を根本的に問い直す機会を生みだしたように思う。子どもが没頭する遊びの面白さは、教師の保育探求の面白さでもあり、保護者の子育ての面白さ、自信につながるものとなっていったからである。しかし、いつまでこの試みが続くかは定かでない。己への問いを忘れた時、あるいは問いがエゴに陥った時、再びわが園の生活芸術の花は枯れてしまうと自戒しているところである。

(国立音楽大学)